ひを一服づゝにても、のどのかはかんはこたへがたきに、ましてすひ茶の二口三口などにて、いかに添なければとて、のどのかはきをやめては也、殊におもひあひたる友のなぐさみとて、薄茶はそれよりはやるといへども、いまだむかしの例を引人ありて、貴人高位などへは申上ざれば、かつ〳〵はやりしを、此例を以てにやさる故ありて古織公○古田織部正よりこのかた、亭も薄茶を立ではかなはず、客ものまではかへらざる物と盛に成也、こひ茶たて、程有て薄茶を専立て申事は、利休より其例今に引事右のごとし、こひ茶立たる小壺の茶をひつ付、うすく一服も二服も立る事、古織公より始る、

〔南方録二〕淡茶之事

水指運び入たらば、水を入添改メて持出で、薄茶中次か棗かに入、薄茶茶碗仕込運び出で、茶をもたつべし、初濃茶の時、茶碗戻りて湯と水と入て一すゝぎ、其次湯にてすゝぎ、直に薄茶可仕と主客挨拶し、又は客より御仕廻あれとの挨拶、世人なべて如此也、道具の賞翫により、茶巾捨る不捨との差別意味重々也、茶巾にて釜の蓋を取ル、是捨たる茶巾也、秘藏の道具に寄てわざと捨る事有、凡は不捨に用てよし、捨ぬ茶巾の時は、時宜に寄、直に薄茶立べし、主客の挨拶次第也、捨たる茶巾の時、主より直に薄茶可進と云、客より御仕廻あれ抔との挨拶、何の分ケもならぬ事共也、故實口傳、後の薄茶の時、茶巾釜の蓋の上に置たらば、捨たるにてはなし、中ふたせずに立る故、ふたの上にかりに茶巾を置たるは捨たるにてはなし、鐵蓋に置事、少心の有事也、口傳、火衰へたらば炭かへて薄茶立べし、眞の薄茶と云事有、濃茶後の事にてはなし、不斗なたる珍客か、又は殘火會抔に有事也、秘事口傳、

〔茶道便蒙抄一亭主方〕薄茶の事

一客亭主隙にて、緩々とはなし在時は、薄茶立べきよしを云て、水壺持出、茶を點る事也、其品濃茶